

外来クワガタムシ類の特徴と取扱いに係る留意点（案）

1 利用等の実態

- 1999 年以降、植物防疫法の有害動物に該当しない外来のクワガタムシ・カブトムシが、愛玩の目的で多量に我が国に輸入、流通されている。
- 現在、輸入されている外来のクワガタムシ類は、2001 年の輸入総数では 200 万頭を超えていると言われている。輸入数の多い種は次のとおり。
 - ・アトラスオオカブトムシ 20 万頭以上
 - ・オオヒラタクガタ 約 10 万頭
 - ・コーカサスオオカブト 6 万頭以上
 - ・アルキデスヒラタクワガタ 5 万頭以上
- 国内の流通量、飼養者数等の実態は明らかでないが、安易に販売、飼養がなされ、簡単に入手できる状況にあることから、放棄、逸出個体の定着が懸念されている。また、近年、意図的と考えられる放虫も報告されている。

2 外来クワガタムシ類による生態系等への影響

- ヒラタクワガタなど由来の亜種と近縁な亜種については、屋内実験により交雑が確認されており、遺伝子汚染が予想される。
 - ・パラワンオオヒラタクワガタやダイオウヒラタクワガタは由来亜種のヒラタクワガタと、グランディスオオクワガタは由来種のオオクワガタと交雑し、その F 1 個体も稔性が確認されている。
 - ・スマトラオオヒラタクワガタと由来亜種のヒラタクワガタとの雑種が野外で発見されている。
- 成虫・幼虫が由来のクワガタムシと競合することにより、由来種の生態的地位を脅かす可能性がある。
- 外来のクワガタムシ類に随伴するダニや寄生虫などが由来のクワガタムシ類に寄生することにより、由来の生態系に被害を及ぼす可能性がある。
- ユーラシア、東南アジア、アフリカ北部、北アメリカ、オーストラリアなどから輸入されているが、我が国では、温帯生息種だけでなく熱帯に生息する種も冬季の越冬が可能と考えられ、定着する可能性がある。なお、定着実績に係る明らかなデータは示されていない。

3 取扱いに係る留意点

- 由来亜種との交雑個体が野外で発見され、室内実験で F 1 個体も稔性が確認されているヒラタクワガタの仲間については、生態系への被害を及ぼすおそれが推測されることから、その取扱いについて十分な検討が必要。
- 外来クワガタムシ類の定着に係るデータを集めるため、野外での調査の実施を検討する必要がある。

- クワガタムシ類の飼養者には小さな子供も多く含まれていることから、専門家の情報ネットワークや専門雑誌等のメディアを活用して利用者（飼養者、業者）に対して外来生物問題の意味について普及啓発していくことが重要である。

4 その他留意事項

- 本来輸入が認められていない種の販売もしばしば見られる。
- 原産国における乱獲による個体数の減少が懸念されるとともに、原産国で採集もしくは輸出が規制されている種類が不正に輸出・販売されている事例もある。

5 主な参考文献

- ①荒谷邦雄（2002）クワガタムシ科における侵入種問題．昆虫と自然，37(5)：4-7.
- ②荒谷邦雄（2003）クワガタムシ・カブトムシにおける移入種問題．滋賀県琵琶湖博物館企画展示資料：94-97.
- ③荒谷邦雄（2003）ペットとして輸入される外国産コガネムシ上科甲虫の影響．森林科学，38：21-32.
- ④五箇公一・小島啓史（2003）クワガタムシ商品化がまねく種間交雑と遺伝的浸食．昆虫と自然，38(3)：6-12.
- ⑤Goka et al. (2004) Biological invasions caused by commercialization of stag beetle in Japan. Global Environmental Research, 8(1): 67-74.
- ⑥トラフィックイーストアジアジャパン（2004）カブトムシとクワガタムシの市場調査．34pp. トラフィックイーストアジアジャパン.